

漁況海況予報事業

村山達朗・安達二郎・北沢博夫・清川智之

目 的

沿岸沖合漁業に関する漁況と海況とを調査研究し、その結果にもとづいて作製された速報ならびに予報を正確迅速に広報普及し、漁業経営の安定に寄与することを目的とする。

調 査 の 実 施 概 要

1. 海洋観測の種類と実施月（付表に海洋観測記録及び卵稚仔査定結果を示す）

観 測 年 月 日	調 査 名	観測点	調 査 員
62. 4. 8 ~ 10	沿岸定線調査	35(15)	北沢 博夫
62. 4. 30 ~ 5. 2	沿岸定線調査	33(14)	村山 達朗・清川 智之
62. 6. 1 ~ 5	漁場一斉調査	19	村山 達朗
62. 8. 3 ~ 8. 6	沖合定線調査	20	村山 達朗・清川 智之
62. 9. 2 ~ 6	漁場一斉調査	32(8)	村山 達朗
62. 9. 30 ~ 10. 2	沿岸定線調査	20	北沢 博夫
62. 11. 12 ~ 14	沿岸定線調査	13	村山 達朗
62. 12. 14	ミニ定線調査	3	
63. 3. 5 ~ 7	沿岸定線調査	27(11)	北沢 博夫

()は補間点の数

水温・塩分検定：村山 卵稚仔同定：北沢 生物調査：安達・村山・清川

2. 観測定線 図1に示す。

3. 調査項目

観測層 0, 10, 20, 30, 50, 75, 100, 150, 200, 300 m 深

観測項目 水温, 塩分, 卵稚仔, 気象, 海象, 釣獲試験

4. 調査船・観測機器

調査船 島根丸 (139.06トン, 770馬力)

観測機器 ナンセン採水器・サリノメータ（オートラブ社）・防圧転倒温度計・DBT（環境計測システム）・測深器（油圧式3.7馬力 1,500m）・魚群探知機（古野電機）

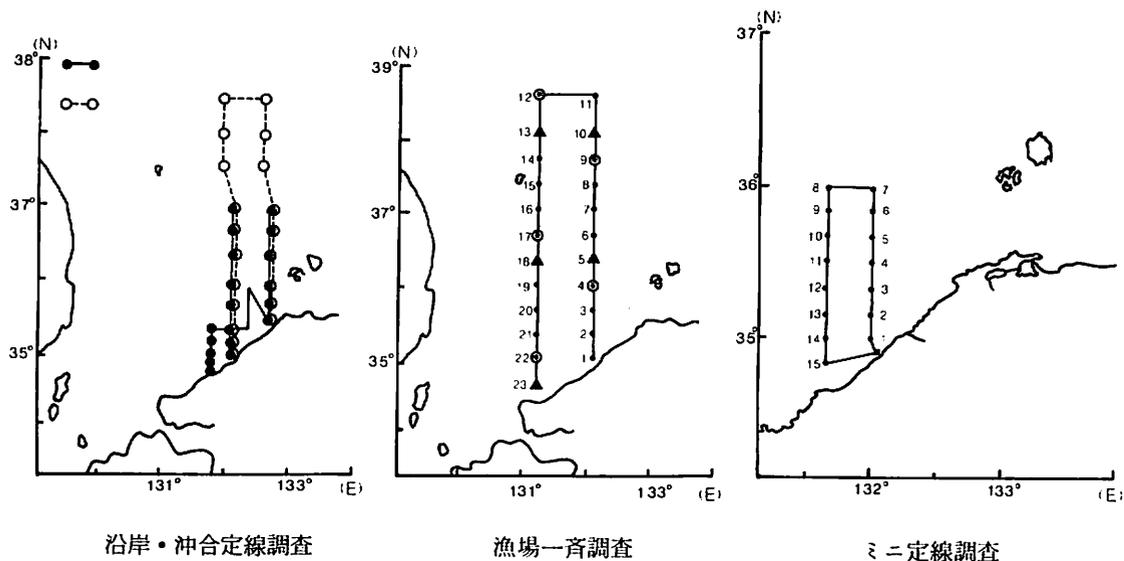


図 1 観 測 定 線

調 査 結 果 の 概 要

昭和62年4月から昭和63年3月までの浜田沖北方断面の水溫分布および、平年差を図2～9に示した。各月の海況の概要は以下の通りである。

- 4月：距岸30～60マイルまでの沿岸域では全般に平年よりやや高めの水溫分布となっているが、沖合側は平年よりかなり低めの所もみられ、沿岸の暖水域との間に強い潮境を形成している。
- 5月：距岸50～60マイルまでの沿岸域はほぼ平年並みの水溫値を示しているが、沖合域は前月同様平年より低めとなっている。しかし、浜田北方100マイル付近には東韓暖流域から舌状の暖水の張り出しが認められる。
- 6月：竹島周辺に中心を持つ冷水域が強勢で、距岸30～40マイル付近に強い潮境を形成し、水溫は全般に平年より1～2℃低めとなっている。
- 8月：沿岸域の水溫は平年並みかやや高めであったが、沖合域は冷水の接岸傾向が続いており、距岸70～80マイルの海域の水溫値は平年よりやや低めとなっている。
- 9月：沿岸部は平年並みからやや高めの水溫となっているが、沖合域ではウツリョウ島北方から冷水が南下しており、竹島周辺海域の水溫は平年よりかなり低めとなっている。
- 10月：表層域で一部平年より低めの海域がみられたが、全般に水溫は平年並みとなっている。
- 11月：水溫は全般に平年並みからやや高めとなっており、隠岐島北東には平年よりかなり高めの海

域が認められた。

3月：水温は全般に平年並みからやや高めで、特に隠岐島北方には顕著な暖水塊が認められる。沖合からの冷水の南下は竹島付近から山口県尻岬沖にかけて目立っており、対馬から山口県の距岸30マイル付近には顕著な潮境を形成している。

図10に恵曇港における表面水温の旬平均と平年偏差を示した。本年度は6月中旬まで平年並みで推移したが、その後平年並みからやや低めとなり、9月下旬から10月にかけてはかなり低めであった。11月にはいはほぼ平年並みに回復し、一時的に低めとなった時もあるが全般的には平年並みからやや高めで経過した。

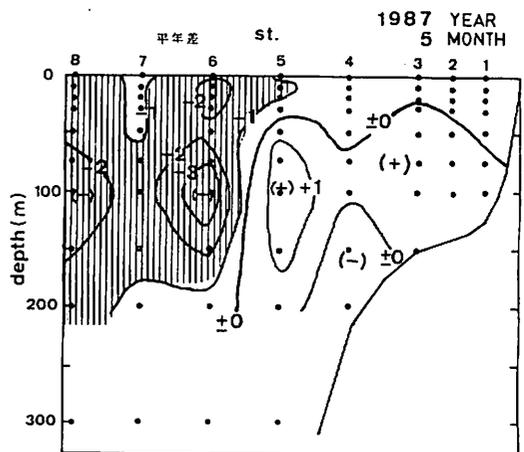
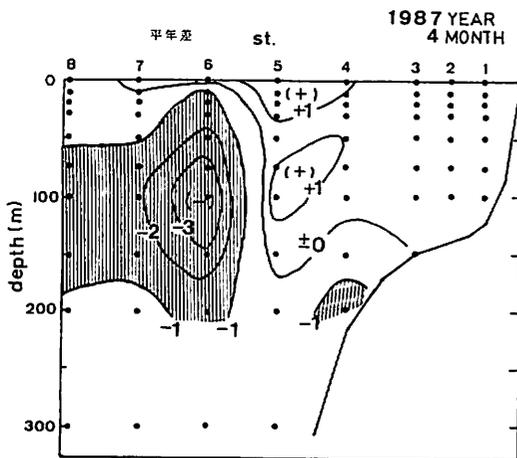
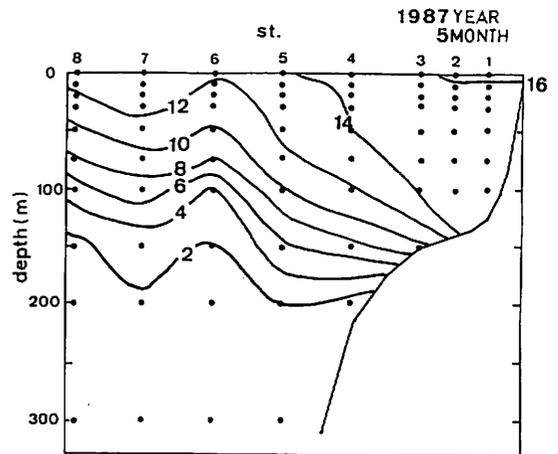
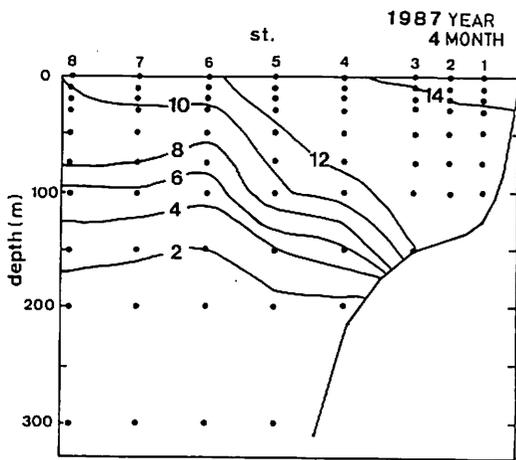


図 2

図 3

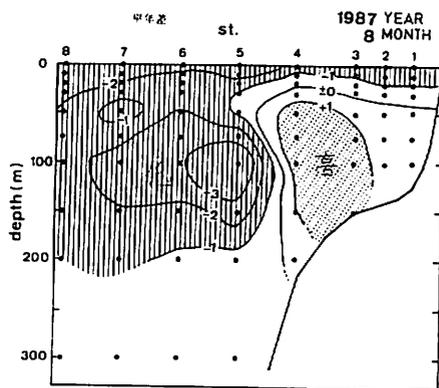
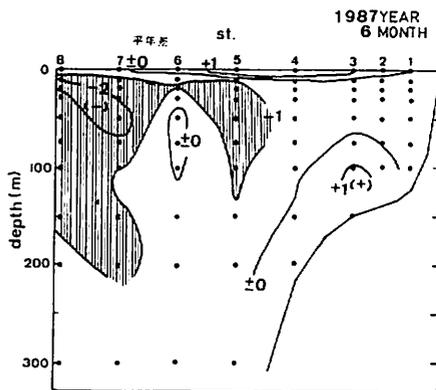
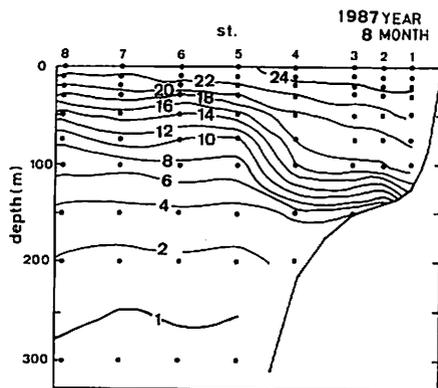
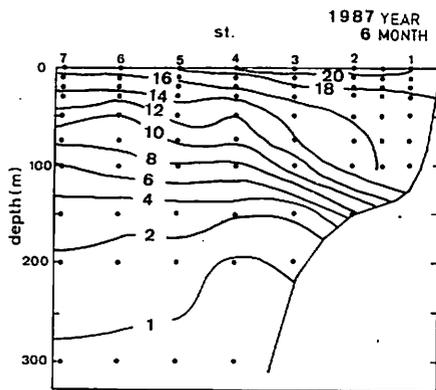


图 4

图 5

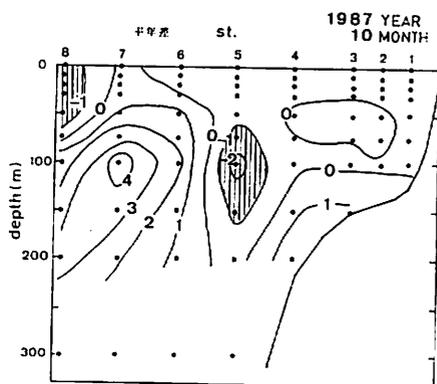
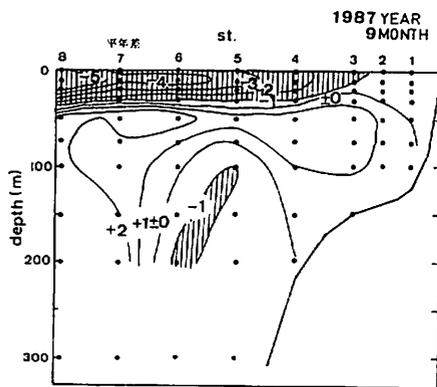
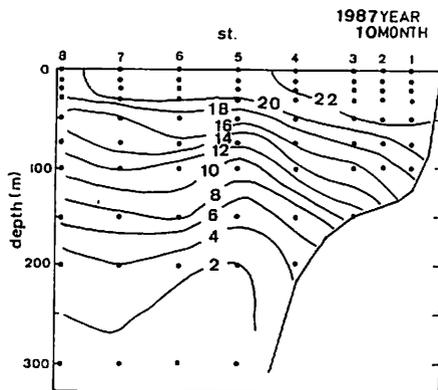
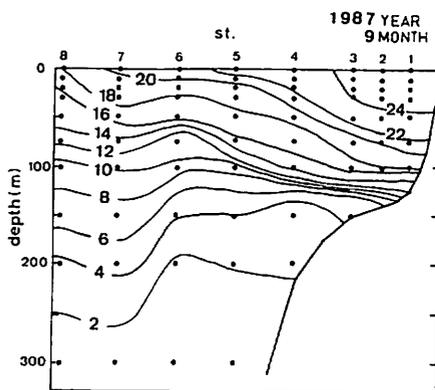


图 6

图 7

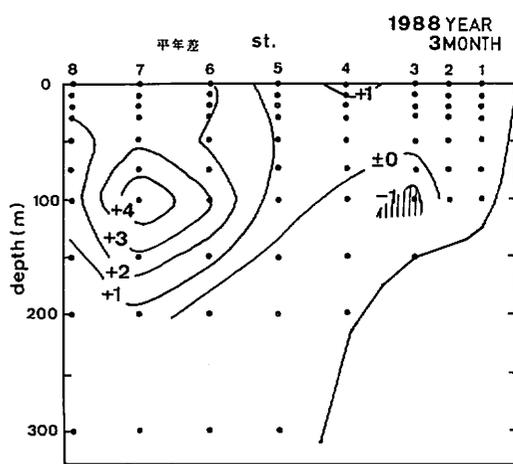
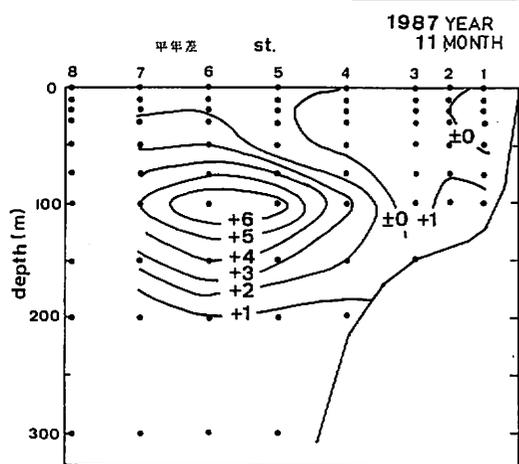
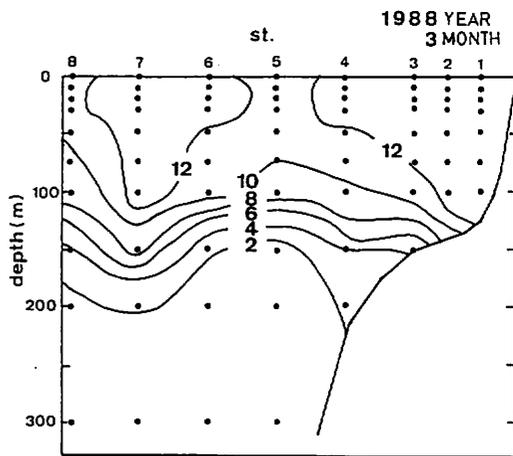
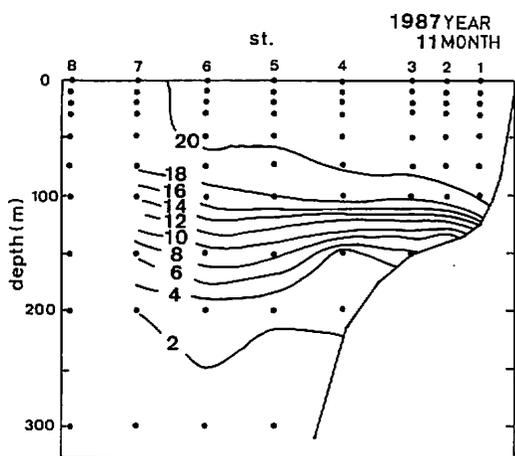


图 8

图 9

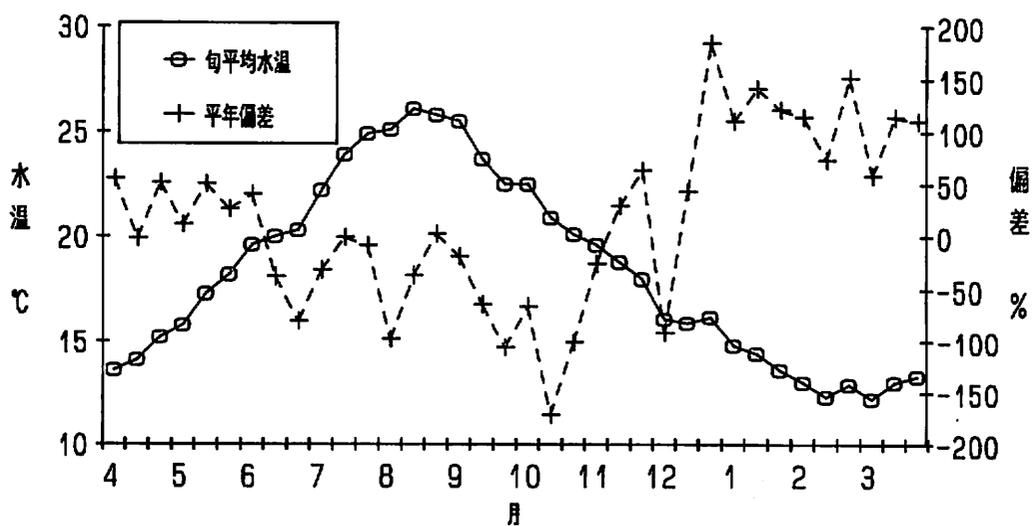


图 10

漁 況

1) 漁獲量の経年変化

図11に昭和40年以降の浜田港の巾着網における主要3魚種漁獲量と総漁獲量の経年変化を示す。

浜田の巾着を漁獲量からみるとはっきりとした魚種交代がみられ、昭和40年以降、44年までがマアジ、昭和45年以降、50年までがマサバ、昭和51年以降はマイワシが漁獲の主体となっている。

総漁獲量については、昭和50年代以降、急激に増大しているが、これはマイワシの漁獲量が大幅に増加したためである。このことはおそらく、マイワシの資源水準が高くなってきたためであろうと思われる。その結果、昭和61・62年には100,000トンの大台を突破した。これは、それまで最高だった昭和60年の73,000トンを大幅に上回るものである。

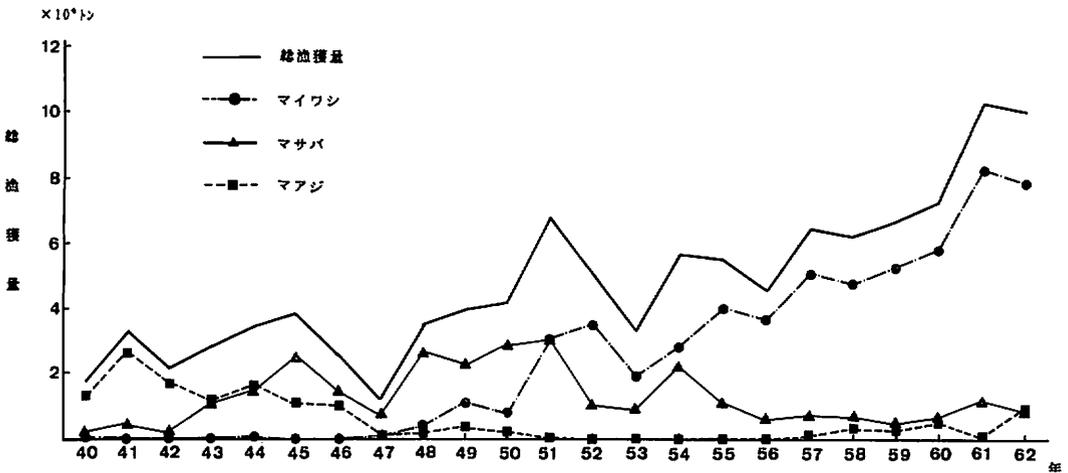


図11 浜田港における巾着網漁獲量の経年変化

2) 魚種別漁獲量の季節変化

図12～15に昭和60～62年のマアジ、マサバ、マイワシ、ウルメイワシの漁獲量の季節変化を示す。

1. マアジ

図12にマアジ漁獲量の季節変化を示す。

マアジは、昭和40年代前半の好漁期にも春と秋に漁獲のピークがみられていたが、ほぼ周年を通じて漁獲されていた。しかし、資源水準が低下した近年では、浜田沖に魚群が来遊する、4～7月（春漁）と9～11月（秋漁）のみに漁獲されており、そのほかの季節にはほとんど漁獲されていない。漁獲対象群は、昭和61・62年とも、春漁では前年に生まれた1才魚が、秋漁ではその年に生まれた0才魚が主体であった。

例年、春漁は、前年の秋漁が関係し、秋季に0才魚が多量に漁獲された翌年の春漁は、好漁であ

ることが多い。浜田沖では、資源量の多少にかかわらず、この年齢のものが漁獲の主体となっている。

マアジの漁獲量は、昭和61年は1,000トンにも満たない不漁であったものが、昭和62年には、10,000トンを超えた。これは、この年の秋季の漁獲量が非常に多かったためである。10,000トンを超える漁獲量は、昭和46年以来のことである。このような大きな変動は卓越年級群に由来するが、この卓越年級群は、マアジ資源の回復に大きな影響を及ぼすもので、これらが産卵に加入することにより、徐々に資源量が増大し、やがては安定したマアジ資源になるものと考えられている。

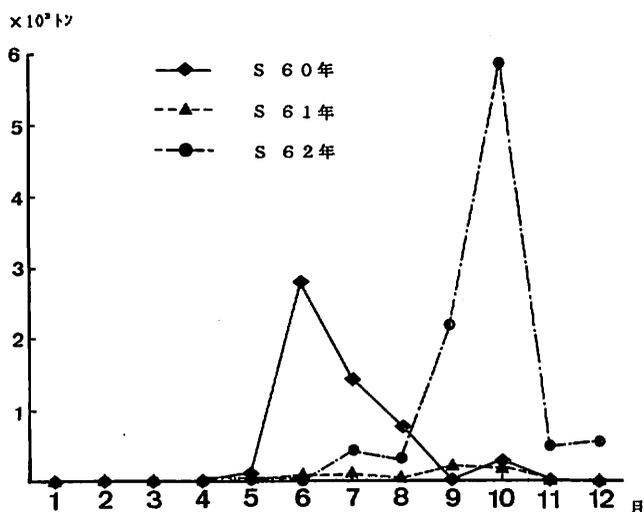


図12 浜田港におけるマアジ漁獲量の季節変化

卓越年級群は、マアジ資源の回復に大きな影響を及ぼすもので、これらが産卵に加入することにより、徐々に資源量が増大し、やがては安定したマアジ資源になるものと考えられている。

2. マサバ

図13にマサバ漁獲量の季節変化を示す。

昭和61年の漁獲量は、4月から7月にかけてが好漁で、また、11月から12月にかけての秋漁もかなりまとまった漁獲があったことから、6年ぶりに10,000トンを超え12,000トンとなった。昭和62年は、61年と比較して6～7月の漁獲量が少なかったため、9,000トン不足であった。漁獲の対象となっているのは、近年、0、1才の豆、ギリサバであるが、2才以上の中、大サバの漁獲量は少なくなっている。

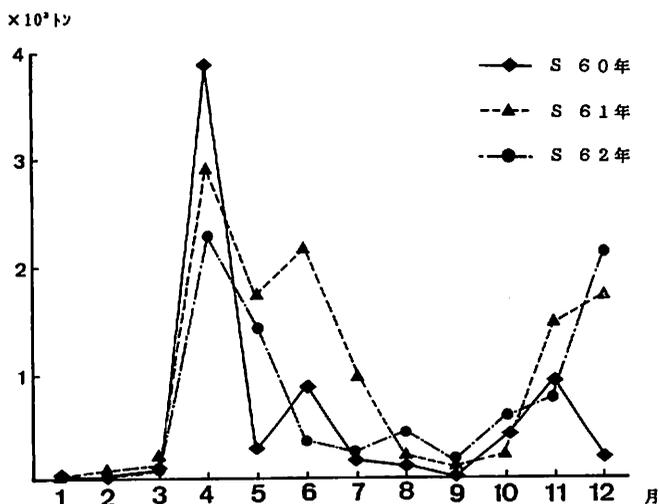


図13 浜田港におけるマサバ漁獲量の季節変化

現在、対馬暖流系のマサバ資

源は低水準であると言われている。年級によって、また、魚群の分布状況によって、漁獲量がかなり変動することが考えられるが、産卵群が回復するまでは、資源の増大、安定は望めないものと考えられている。

3. マイワシ

図14にマイワシ漁獲量の季節変化を示す。

昭和61・62年におけるマイワシ漁獲量は、それぞれ83,000トン、78,000トンであった。これは、これまで最高であった昭和60年の58,000トンを大きく上回るもので過去最高の漁獲量である。この大幅な漁獲増は初漁期である12月の漁獲量が、昭和60年以前と比較して大幅に増加したこと、冬季にここ数年と同じく安定した漁獲があったこと、春から初夏にかけても、ある程度まとまって漁獲されたことなどによるものである。

月別にみると、12～4月が中・大羽イワシ主体、5～7月が中羽イワシ主体、8～11月が小羽イワシ主体であった。

しかし、ここ数年、マイワシ漁獲の大幅な増加とは対照的に、マイワシ産卵量の減少、小羽の漁獲の遅れや漁獲量の減少、魚群分布域の縮小など、マイワシ資源減少を示唆する要因が提示されている。

4. ウルメイワシ

図15にウルメイワシ漁獲量の季節変化を示す。

昭和61・62年の漁獲量はそれぞれ、5,000トン、2,200トンであった。昭和61年の漁獲量は、近年では最も多いもので、この原因には、7～8月にかけての中・大ウルメイワシ、11月の小ウルメイワシが多く漁獲されたことがあげられる。

ウルメイワシの資源水準は他の浮魚の比較して低位で安定していると言われている。年によっては漁獲量がかなりすくない年もあるが、マイワシやマアジの様な周期的変動はみられない。

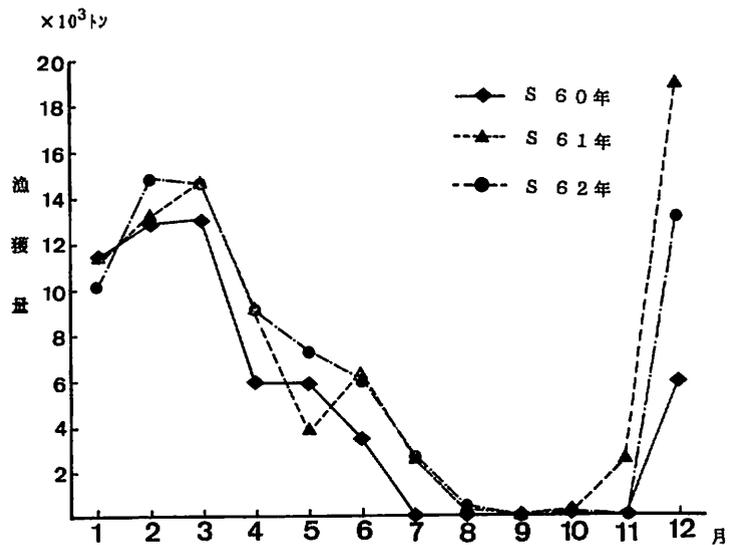


図14 浜田港におけるマイワシ漁獲量の季節変化

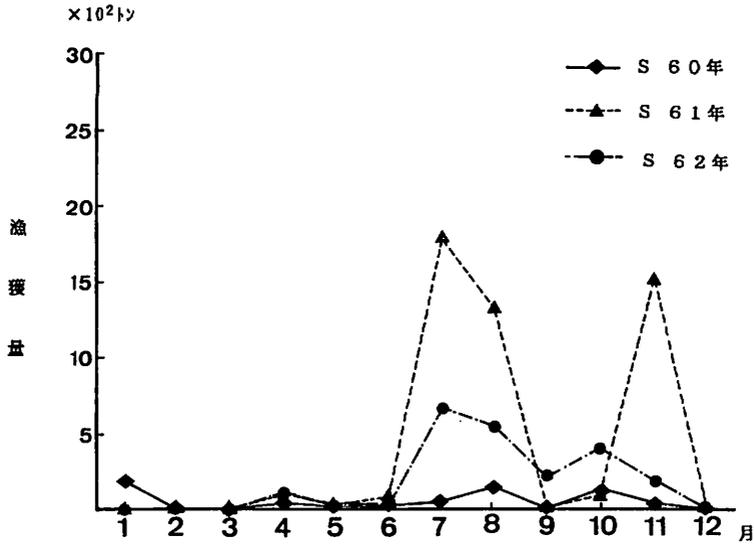


図15 浜田港におけるウルメイワシ漁獲量の季節変化

5. スルメイカ

図16に浜田港に水揚げされた、県外船によるスルメイカ水揚量を、図17には浜田市漁協所属の小型沿岸イカ釣船による水揚げ量を示した。

県外船の水揚げは漁期初め(5~7)は平年(1981~1986年度の平均)を大きく下回っていたが、8月以降平年を上回る水揚げが続いた。特に冬季(12~2月)は平年を大きく上回り、12月に年間の最高水揚げ量を示す珍しい漁況となった。冬季の水揚げ量の増大は、同時期山陰西部において釣りによるヤリイカの大量漁獲があり、各地からイカ釣船がこの海域に集中したことが原因となっている。

沿岸小型イカ釣の水揚げ量は春季は1985年の半分程度であったが、6月以降'85、'86年を常に上回る好漁となった。特に8月以降は沖合域にお

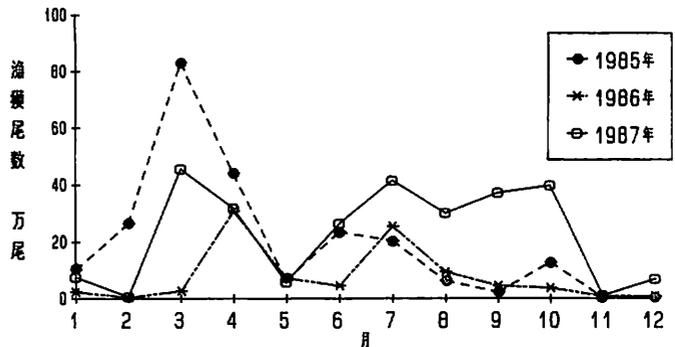


図16 浜田港における小型沿岸イカ釣り水揚量

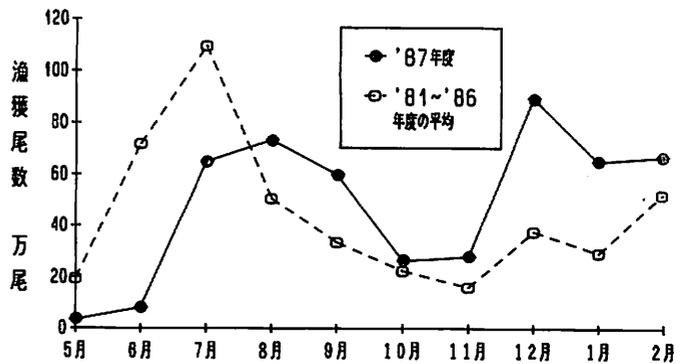


図17 浜田港における県外船水揚量

けるいわゆる“秋生まれ群”の好漁を反映し、この群の産卵接岸によって近年では珍しく本格的な秋漁が形成された。

6. シロイカ (ケンサキイカ・ブドウイカ)

浜田港における沖合底曳網と釣りによる水揚げ量を図18に示した。沖合底曳網による水揚げ量は、1981年以降最高であった前年は下回ったものの過去6ヶ年平均を上回り比較的好漁であった。これに対し釣りによる水揚げ量は1981年以降では最低であり、不漁であった。

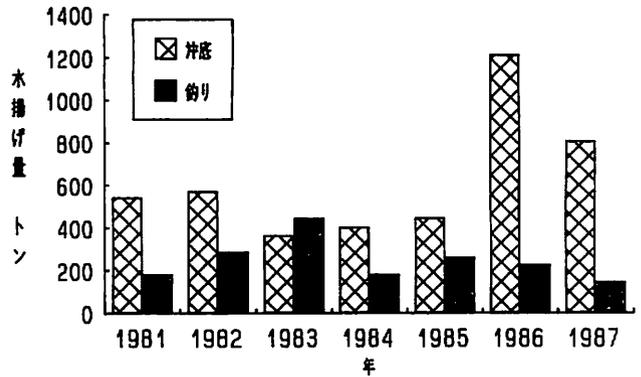


図18 浜田港におけるシロイカ水揚げ量

7. ヤリイカ

浜田港における沖合底曳網と釣りによる水揚げ量を図19に示した。沖合底曳網・釣りともに1981年以降最高の水揚げ量であった。特に釣りは過去6ヶ年平均の7倍以上と好漁であった。このため、各地からイカ釣り船が集まりスルメイカの漁獲増にも結びついた。

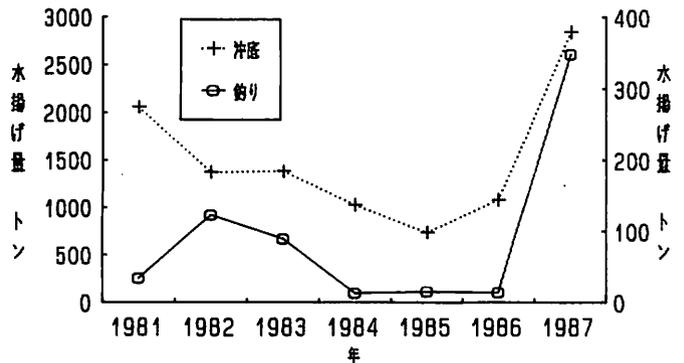


図19 浜田港におけるヤリイカ水揚げ量